



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

11. 「オーロラブラック」の準高冷地における簡易被覆栽培の適応性

[要約]

「オーロラブラック」は準高冷地での簡易被覆（露地）栽培において、大粒で着色が良く、糖度上昇や減酸の年次変動が少なく安定しており、栽培に適した品種である。

[担当] 農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山県ではオリジナル品種「オーロラブラック」の生産拡大を図っている。そこで、ブドウ産地が形成されていない準高冷地において、普及が容易な簡易被覆栽培での適応性を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 準高冷地の真庭市蒜山（標高460m）における簡易被覆栽培での発芽は4月下旬、満開は6月中旬、成熟開始（果粒軟化）は7月下旬、収穫開始は9月下旬から10月上旬である（図2）。
2. 成熟した果実の糖度は17～18° Brix、酸含量は0.5 g/100ml程度で安定し（表1）、強い酸味は残らない（達観）。
3. 平均果粒重は20 g以上で、樹齢が進むにつれ大粒化する傾向がある（図3）。
4. 平均果粒重と果皮色には一定の関係が無く、果皮色は年次変動が認められるが全て上位等級区分（カラーチャート：C.C. 8以上）である（図1、図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 発芽期は4月下旬であるが、準高冷地ではこの時期の最低気温が0℃を下回ることがあるため、発芽後の降霜時には燃焼法等の防霜対策が必要である。
2. 図表中に示した果実形質は無核肥大処理が2回処理（1回目：満開時ジベレリン25ppm（フルメット2.5～5 ppm加用）、2回目：ジベレリン25ppm）のデータである。
3. 果房重が700 g台、着果量は1～1.8 t/10aで栽培した結果であり、さらに大房・着果過多にすると果皮色が著しく落ちる可能性がある。
4. 着果管理および枝管理は県栽培指針に準ずるが、一般的に9月以降の降雨が多いため、簡易被覆（農ポリ0.05mm）は収穫期まで継続し、降雪前に除去する。
5. 病虫害防除は県防除指針に概ね準ずるが、降雨が特に多い年にはべと病やさび病を対象として袋掛け後のボルドー液を7～9月にかけて3回以上散布するのが望ましい。



[具体的データ]



図 1 真庭市蒜山で簡易被覆栽培した「オーロラブラック」の成熟果房（果皮色のC.C. 10、2016年）

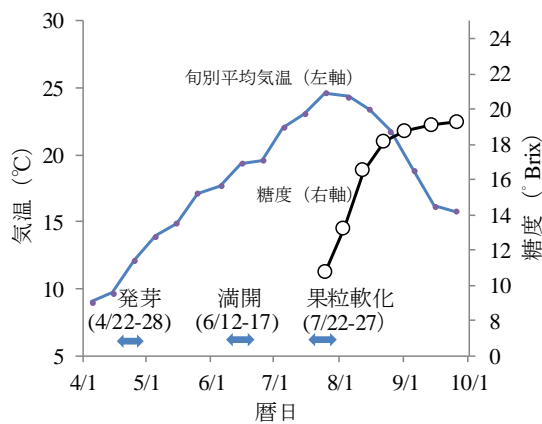


図 2 真庭市蒜山における簡易被覆栽培「オーロラブラック」の生育期の平均気温および糖度の経時変化（生育期及び旬別平均気温は2014～2016年、糖度は2016年のデータを示す）

表 1 真庭市蒜山で簡易被覆栽培した「オーロラブラック」の収穫果実^zの果房重、糖度及び酸含量

年次	(樹齢)	果房重 (g)	糖度 ^y (°Brix)	酸含量 ^x (g/100ml)	着果量 (t/10a)
2014年	(4)	715	17.6	0.54	1.0~1.1
2015年	(5)	731	17.9	0.51	1.6~1.7
2016年	(6)	747	18.4	0.52	1.2~1.8

^z 調査日は2014年:10月3日、2015年:10月13日、2016年:9月28日

^y 果房肩部から先端の5粒平均値、県生産目標は17°Brix以上

^x 酒石酸換算値、生産目標は規定なし（一般的に0.5g/100ml程度の酸味は問題にならない）

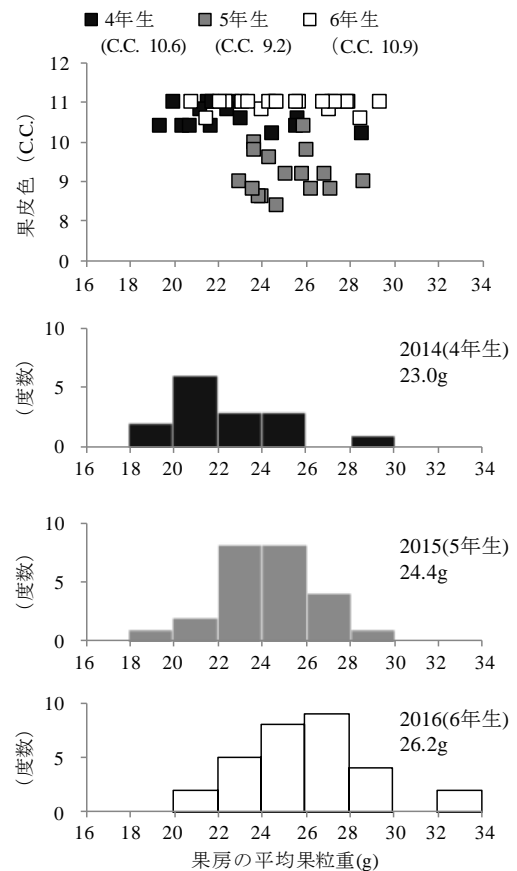


図 3 真庭市蒜山で簡易被覆栽培した「オーロラブラック」の果房の平均果粒重の分布（下）及び平均果粒重と果皮色の関係（上）（2014～2016年）

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2015年度

研究担当者：金澤 淳、新見 敦

関連情報等：1) [尾頃ら \(2003\) 岡山農総セ農試研報\(21\)、1-3](#)

2) [平成25年度試験研究主要成果、45-46](#)